



営農NEWS



イネ生育の初～中期に水田が冠水した場合には、黄化萎縮病の発生に注意しましょう

一昨年は、県央地域を中心として、イネ黄化萎縮病の発生した水田が多くみられました。

本病は、大雨によって氾濫しやすい河川流域の水田で、局地的に発生がみられていましたが、近年は河川の改修や水田の基盤整備などで水田周辺環境が整備され、被害発生が減少化の傾向でした。

しかし、田植え後のイネ生育初～中期に、突発的に豪雨並みの集中した降雨があったり、はききれない流水で水田が浸冠水した場合には、イネ黄化萎縮病の発生が多くなってしまいう可能性があります。

このため、黄化萎縮病の感染可能な5～6月頃に、低温多雨の集中豪雨のような天候に遭遇した場合には、発生が多くなる恐れがありますので、過去に発生したことのある水田及びその周辺地域においては、事前の対策を準備しておく必要があります。

<黄化萎縮病の病徴>

冠水等により病原菌がイネに感染すると、その2～3枚後(約2週間後)の展開葉は黄化し、やや幅広となって薄いカスリ状の斑点が入り、株全体が黄化、萎縮したように見えます。イネ生育初期に感染した症状の激しい茎は、次第に枯死します。それ以降の罹病茎でも、生育不良で出すくみや奇形穂となって不稔になります。

これらの症状は、初め健全茎に比較して微妙に葉色が薄かったり、生育不良として表れますが、症状が進むと明らかな違いとなって確認できます。

イネ黄化萎縮病に罹病した株や分けつ茎はほとんど収穫が見込めませんので、多発生すると著しい減収となります。

<発生生態>

本病原菌はカビの一種で、主に水辺のイネ科雑草や被害株などの中で越冬し、翌春、胞子のうが形成され、降雨や浸冠水にあうと遊走子が泳ぎだして、田植え後のイネのごく若い組織に感染します。

本病の感染適期は、田植え10日前後から分けつ中期(6月末)頃とされ、特に7葉期頃に最も罹病的といわれています。しかし、幼穂形成期以降になると感染しにくくなります。また、水温は15～20℃の頃に感染しやすく、それより高いと活動が衰えます。なお、黄化萎縮病が発病した株は、いもち病にかかりやすくなります。

<防除対策>

- 1 畦畔等の水田周辺のイネ科雑草は、常に除草しておきましょう。
- 2 イネが感染しやすい期間の水温を高めに確保するため、田植えはできるだけ遅くしましょう。
- 3 常発田では、感染を逃れた茎での補償収量に期待するため、植え付け本数はやや多めにしましょう。
- 4 田植え後は適正な水位に努め、深水、浸水、冠水を防ぐために、圃場や用排水路の整備に努めましょう。
- 5 防除薬剤はリドミル粒剤2のみです。初発生後、直ちに散布します。また、常発地では田植え2～3週間後に予防散布または浸冠水後に直ちに散布します。散布は、まきむらのないよう均一に散布し、その後7日間は落水、かけ流しをしません。また、本剤は収穫前日数が長いので、使用時期には十分注意が必要です。

表1 イネ黄化萎縮病の防除薬剤(平成26年4月30日現在)

薬剤名	使用量	使用時期 / 使用回数
リドミル粒剤2	6 kg/10 a	収穫90日前まで / 2回以内

農薬を使用する際は、ラベルに記載の登録内容、使用法、注意事項などを確認し、飛散に注意して使用して下さい。



生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040